

目次

極悪人の肖像

5

訳者あとがき 255

解説 真田啓介 258

Portrait of a Scoundrel
1938
by Eden Phillpotts

主要登場人物

アーウィン・テンプルⅡフォーチュン……………テンプルⅡフォーチュン準男爵家の三男
ハリー・テンプルⅡフォーチュン……………テンプルⅡフォーチュン準男爵家当主。アーウィンの

長兄

ニコル・テンプルⅡフォーチュン……………テンプルⅡフォーチュン家の次男
ステラ・テンプルⅡフォーチュン……………ハリーの妻
ルパート・テンプルⅡフォーチュン……………ハリーの息子
ニタ・メイデュー……………ルパートの乳母
ノーマン・バクストン……………ロンドン警視庁の警部
ジェラルド・ポータル……………ロンドンの金融業者
ジェラルド・ポータル……………ジェラルドの娘
ウィリアム・ホワイトヘッド・ローレンス……………ロンドンの医師
ウッドベリー……………ロンドン警視庁の主任警部

序文

利己心は常に、不和や軋轢を招く反社会的な悪徳に違いないが、その影響は様々である。平均的な利己主義者は人間という素材と、善意の総和から引き出される膨大な潜在的活力の無駄遣いを示しているに過ぎない。その行動によつて傷つくのは自らの魂だけであり、自我を求める絶え間なき苦闘が社会を損なうことはない。こうした人間は善あるいは悪に対し、梨の種ほどの貢献をなすことすらなく死んでゆく。しかし大いなる知性と意志とを兼ね備えた、病的なまでの自己中心主義者は、歴史上の独裁者やいわゆる「雄弁家」が如実に示す通り、はるかに恐ろしい悪を生み出す。アーウィン・テンブル＝フォーチュンの回想は、道を誤った天才による恐怖に満ちた記録である。復讐を求める本能や願望がいかなるときも自制されねばならない一方、自分自身を見舞う究極的な悲劇の他、悪人を打ち負かすメメシス（応報天罰の女神）が存在しないこともまた確かなのだ。

第一章

数多い格下の家柄のならいに従い、テンプル・フォーチュン家は良かれ悪しかれ多くを語らず何世代も生き延びた。他人に害をなすことも、興味をかき立てることも、誰かを傷つけることもなかったわけだ。一族の生存を可能たらしめたのは、ある種の健全かつ人間的な狡猾さだった。歴史を見ると、この一族は常に一番大声を張り上げる者の側に立ち、また国家の危急存亡の際には態度を明らかにせず、全ての危機が去るといつの間にか勝者の側に立っていたのである。

一族の創始者が、知性をはじめ幾多の才能に恵まれていたのは間違いない。彼はその当時において名声を勝ち取り、巨万の富を築いたうえ、長年の功績により準男爵の爵位を授けられた。その子孫でかくも偉大なる業績を挙げた人間はいないものの、一家はその後も繁栄を続け、一族に根づいた勤勉の精神、そして代々引き継がれた金銭への愛着のおかげで、世界各地に散らばる家産をますます大きなものにしていった。先祖代々の地所も拡大を続け、ファイアブレイスは今やイースト・デヴォン地方で最も広大かつ豊かな土地となっていた。

一方で危機の瞬間がないわけではなかった。ジョージ王朝時代の初期、当時の若き当主が親族の眉をひそめさせるほどの奇矯な行動に及び、代々受け継がれてきた家産を湯水の如く浪費するなど、それまで一族には無縁だった性向を見せつけた。だが幸運なことに、テンプル・フォーチュン家の屋台

骨が揺るぐより早く、この常軌を逸した若者は決闘で命を落とし、彼の後継者——テンブル・フォーチュン家の血をより色濃く引き継いだ弟——が危機を救ったのだった。

これらはいずれも、死と相続税が数多い旧家の血統を断ち、古い秩序を破壊するとともに、資産の所有権を複雑なものとする以前の話である。

それ以降も放蕩者が出ることはあつたけれど、いずれも直系の人間ではなく、たいいてい神の鋭い注意によつて放埒は抑え込まれてきた。だがついに、連綿と続く一族が、ひととき深刻な危機に瀕するときに来た。テンブル・フォーチュン家の没落と、それに続く滅亡の物語は特筆に値すべきものでありながら、それでいて全く知られていない。そこで私は、事実が忘れ去られる前にそれを伝えようと決意した。かくも密接に関わつた事件を語れるのは、もはや私しかない。一族の血筋が絶えて広大なファイアブレイスが魅力的な開発地へと変貌する前に、私はこの奇妙な物語を詳しく述べるつもりである。完成した段階で文章を破棄するか、それとも後世に残すかはまだ決めていない。しかし事実を提示しつつ、私自身の記憶を蘇らせるだけでも、読み応えは十分にあるはずだ。それと同時に、疑問の余地のない真実を明らかにしたところで、今や誰かが傷つくことはなく、しかもそれは、私自身の記憶に依るしかない。これから述べる物語は必ずや読者の興味を惹くだろう。高德なる者による弱々しい名声よりも、極悪人による名声のほうがひととき印象に残るものだ。

過去を振り返るにあつては、典型的な初期ヴィクトリア朝の人間である、サー・ヴィクター・テンブル・フォーチュンより前に遡る必要はない。彼はファイアブレイスを統治し、素封家、主任司祭、医師、そして教師が一つの教区をなして民衆の要求に応えていた、かの平穩な時代における莊園領主の地位にあつた。サー・ヴィクターは博愛の精神に満ち、召使いに対してもある種の礼儀をもつて接

するのみならず、邸宅に住む人間が残らず幸福に満ちていることを好んだ。笑顔が自分を幸せにする一方で、誰かのしかめ面を不快に感じることを、彼は隠そうとしなかった。サー・ヴィクターは、自分には想像もつかぬ経験から多くを学んだ貧しき者よりはるかに無知であり、しかも高貴な生まれの人間が身分の低い貧乏人の思考方法を理解することは不可能であるにもかかわらず、その方面で賞賛すべき努力をしていた。教育を軽んじ、その発展を国家への害悪として反対していたが、領民の衣食住を常に考え、働きに出る男たちだけでなく、その妻や子どもたちにも十分に食べ、服を着て、家に住む権利があるのだと常々語っていた。領民は、先祖を愛し敬うが如く、サー・ヴィクターを崇拜した。神を恐れ、自らの小さな世界を慈悲の心で治めたサー・ヴィクターが倒れたとき、同時代の人間は、彼のような素封家が今後現われることはないだろうと言いつつ、ヴィクトリア朝におけるそれ以前の人間も、かつての領主が天に召されたときは同じように予言していたのだが。

サー・ヴィクターの最期は、不相応な運命の出来事によって暗い影を投げかけられた。当時、彼は議員になることを自らの義務と考えていたが、その意志を形作つたのは激しい義務感に他ならない。骨の髄まで田舎紳士だったサー・ヴィクターは都市の生活を嫌っており、政治的な問題については先祖から引き継いだ考え以上のものを持っていなかったのである。総選挙で自らの選挙区から立候補した彼は当選を疑わず、かなり大きな住まいをロンドンに借りるだけでなく、投票日前から将来の計画を立てていた。対立候補のホイッグ党員は一代で巨富を築いた成り上りの男で、それをもたらしただけでなく、甘言と気前のいい約束で瞬く間に支持を集めるのみならず、選挙民を前に、自分が生まれたことすら知らないとして人々の無知を罵り、心を引き締めて勇敢に振る舞うよう訴えた。男は最初からサー・ヴィクターよりはるかに有利だった。自身も貧困の中から身を起こ

ただだけに、貧乏人が何を考え、感じ、そして何に耐えているかを理解していたからである。また優秀な選挙参謀を雇うのみならず、労働のなんたるかを知らない、品位と優雅さしか取り柄のない対立候補には不可能なりふり構わぬやり方で、自らも精力的に活動した。しかもこのホイッグ党員は、公私にわたってサー・ヴィクターの行動を規定していた古くからの伝統や忠誠心に縛られずにいた。彼はこの準男爵について、他人を語ることも考えることも生まれつきできないのだ、とまでこき下ろした。こうした意見の相違と辛辣な言葉とに戸惑ったサー・ヴィクターは、演説の場で雄弁をふるおうと腐心した。しかしなんと言っても想像力というものに欠けており、ファイアブレイスの外からやって来た聴衆を前にすると、善意だけが取り柄の無力なラクダ、あるいは身軽な敵に翻弄される哀れな闘牛に映るのだった。しかも最近通過した改革法のせいで野次という新たな忌まわしい経験をすることになり、内心の当惑を押し殺すのが常だった。そして最終的に、この悪名高き法律にサー・ヴィクターは屈した。選挙は敗北に終わった——僅差だったのは確かだが、落選に打ちひしがれ、これより後、以前の自分自身と冷静さを取り戻すことはなかった。悲劇はそれにとどまらず、敗北に打ち沈んだ妻も全く別の女性になってしまい、程なく七十一歳でこの世を去る。さらに、後を継ぐ長男までもが戦地で命を失い、後継者の座はバートラム・テンプルⅡフォーチュンに移った。だがバートラムは商業の世界に飛び込んでいて、そこから足を洗う気などさらさらなかった。またサー・ヴィクターには、貴族に叙されていた娘があった。美しく利発な彼女は十九歳のときにある子爵を射止め、王女の侍女となった。しかし、ふとしたきっかけでヴィクトリア女王と喧嘩になってしまい、壮麗たる内宮から永遠に追放されたのである。私は少年の頃にこの女性と会っているが、その記憶はほろ苦くそれでいて今なお鮮明だ。彼女はオペラグラス越しに私を見つめ、こう言った。「テンンプルⅡフォーチ

ユン家の男たちは例外なく端正な顔立ちだけど、あなたはそうじゃないわね。たぶんまともな脳味噌をしているのよ。そんな顔つきだわ」

彼女は正しかった。確かに、私にはまともな脳味噌がある。

サー・ヴィクターの死に伴い、次男のバートラムが後を継いだのは述べた通りである。しかし有り余る精力のはけ口として商売を続けることを許され、自身もその爵位でなく、製鉄業者と呼ばれるほうを好む有様だった。

バートラムは妻ロザムンドとのあいだにハリー、ニコル、そしてアーウィンという三人の息子をもうけた。このうちハリーとニコルは典型的なテンプル・フォーチン家の人間である。背が高くハンサムで、髪は金色、人間的に空虚だが愛想だけはいい。しかしアーウィン——この物語の語り手、すなわち私——は、隔世遺伝という言葉では説明できない異なるパターンを見させていた。まずもって色が黒く、身体もどちらかと言えば小柄である。しかし額が広く、意志は強固で、一族をよく知る者から「生まれたときにすり替えられた子」と判断されかねない性格だった。先祖の肖像画に私とよく似たものが一枚あり、父からも昔の準男爵の一人によく似ていると言われたことがある。記録によると、その準男爵は反社会的な気質を持っており、ジョージ一世の時代に世情の不安を煽ったという。とは言うものの、私と父が喧嘩になったのは一度しかない。自分の後を継いで製鉄業者となり、鑄造所に入ることを父が望んだ、それが原因である。だが私は別の方面における特異な才能を持っており、むしろ医師になることを望んでいたもので、父の希望を拒否した。幼い頃、カエルがどう動くかを確かめようと生きたまま切り刻んで、母親を恐怖に陥れたことがある。医学を志そうと決意したのはこのときだ。かくして、ハロウ校でテンプル・フォーチン家の人間にしては並外れた才能を発揮した私は、

ケンブリッジに進んで首席で卒業し、医学の道へと足を踏み入れたのだった。

当時サー・パートラムは隠退生活に入っており、長男のハリーを後継者に据えていた。しかし父親の持つ精力や支配力は兄になく、商売を嫌い、自宅や田舎の共同体における娯楽のほうを好む仕末。虚栄心が強くすぐに興奮するたちで、精神のバランスを崩しがちだった。しかしそれを気に病むような父ではない。ハリーの商売嫌いは重々承知で、自分が死んだら会社組織にすればよいと考えていたのだ。そのためか、私が後継者とならなかったことをしばしば嘆いていた。

「自分の才覚で食卓の塩さじを一杯にできるのは、一族でお前だけだ。しかしお前はその才能を、全く無駄な職業に浪費している。二人の兄は揃いも揃って間抜けだし、生まれてくる子も間抜けだろう。しかしお前なら、もう少しましな将来を一族にもたせたいはずなんだ」

父は二年前にこの世を去っていた母を追い、莫大な富を遺して息を引き取った。かくして、我々三人が後に残された。後継者のハリー、健康に不安を抱きながらほとんどの時間をファイアブレイスで過ごしている腑抜けのニコル、そしていまや開業医となり、骨の折れる仕事にいくぶん退屈しかけている私である。父は私に、望むならハーレー街で開業できるほどの金を遺してくれたが、私としては世界を回り、リユーマチについての著作を書き上げることが目下の願いだ。世界各地で見られるこの病について、私の知識はすでに医師としてのそれを越えていると信じていたのだ。

父の死から六ヵ月後、四十五歳になっていたハリーは製鉄の世界から足を洗い、子どもものいない未亡人と結婚した。彼女はハリーより二歳だけ若く、優雅かつチャーミングな女性で、以前からハリーに求愛されていた。元夫の死から一年後に二人は挙式を行ない、さらに一年経って息子をもうけた。その出生は二つのことをもたらした。母親は異常なほど健康に気遣うことをやめ、また父親のほ

うには、大抵の男が第一子に対して抱く水準をはるかに超えた、激しい愛情の波が生まれた。それ以降、ハリーの生活はゆりかごを中心に回るようになる。実際この乳児は、いわば無意識のうちに父親を支配していた。それは精神を安定させて寛容にするなど、好ましい影響をハリーに与えるとともに、彼を愛情に目覚めさせた。私の判断するところ、ハリーが自身以外にそうした愛情を抱くなど有り得ないことだった。大抵の男はこうした大仰な感情を抱くことなく、自分の子どもを天からの授かり物くらいに考えるものである。しかし兄にとつて、この子は天の恵みであり、自分を大きく変える——もちろんいい方に——存在だった。兄が乳児にかける期待を周囲は笑ったが、私にはよく理解できた。ハリーが妻とのあいだにこれ以上子供をもうけるのは不可能であり、また兄が子供を授かったという事実は、虚ろで無力な魂をニコル——かわいそうなニコル——が引き継ぐことを意味していた。ニコルは恋というものをしたことがなく、心臓が鼓動を続けているかどうかにのみ関心のある男だ。しかしテンプル・フォーチン家の伝統により染まっているハリーは、息子がいずれ自分の跡を継ぎ、一族の続く限り古い秩序を保つていくものと期待していた。

私は成長を続けるミッドランドの病院を売ってハーレー街を一時的に去り、旅行の計画を立てると、出発の前に兄二人へしばしの別れを告げるべく、先祖代々の地で一週間過ごすことにした。

ハリーとステラ——彼女は相変わらず健康を害していた——が私を歓迎する横で、ニコルは医師の私から見ても奇妙な症状を呈していた。兄二人はこれ以上ないほどの言葉で私を褒めそやし、私が精神的に優れていることを認めたくえで、テンプル・フォーチン家で唯一、真に並外れた人間だと持ち上げた。それは本心から出た言葉であり、私も到着後すぐ二人と打ち解けた——ただの兄弟としてでなく、いつもの善意に満ちた寛容と友情の精神をもって。そのときから、以下に記述する一連の出

来事が始まったのである。